台大日本語文研究第 19 期
2010 年 6 月，頁 223-242
2010-06-02 收稿，2010-08-09 通過刊登

日本神道與中國思想
—以天皇思想為探討主題—

徐翔生*

摘要

日本中世史書《神皇正統記》中記載，日本是神國，天皇是天神之子孫。受到《神皇正統記》影響的伊勢神道，有著明顯的神國主義色彩，而以天皇爲核心。發展至近代日本的國家神道，更強調天皇是現人神，日本是由天皇統治之神國。這種思想持續至二次世界大戰日本戰敗，一直根深蒂固地盤踞在日本人心靈深處而成爲一種信仰。眾所周知，日本神道思想中天皇是神之後裔，日本是由萬世一系的天皇統治。這種獨特的思想，在世界宗教史上頗爲罕見。日本天皇究竟爲何是神的子孫，日本爲何又是應由天皇統治之國？本論文以神道經典《古事記》及《日本書紀》爲例，探討其中所見之天皇思想，深究日本神道思想之由來。另自比較思想之觀點，論述日本天皇思想與中國古代思想之關連，闡明神道與道教之關係。期藉拙論，對日本古代宗教思想及神道之研究能提供一些新的觀點與提示。並期藉此研究，對中日文化思想之比較研究亦能有所助益。

關鍵詞：天皇、《古事記》、《日本書紀》、神道、道教

* 國立政治大學日本語文學系副教授

Japanese Shintou and Chinese Thought: On the Theme of the Thought of the Heavenly Emperor

Hsu, Hsiang-sheng*

Abstract

According to the Japanese chronicle of the Middle Ages *Shinnou Seitoki*, Japan is a divine country and the heavenly emperor is the offspring of the God. Affected by *Shinnou Seitouki*, *isei shintou* obviously has a strong color of divine country concept and it centers on the heavenly emperor. Recently developed *kokka shintou* in modern Japan further emphasizes that the heavenly emperor is a God in the form of a modern man and Japan is a divine country ruled by the heavenly emperor. This thought continued to exist until Japan was defeated in WWII and has occupied so deeply in the mind of Japanese that it has become a religious belief. As it is widely known, Japanese shintouism believes that the heavenly emperor is the descent of the God and Japan is ruled by the heavenly emperor of the same lineage for generations. This unique concept is rare in the history of world religions. Why is the heavenly emperor the offspring of the God? Why is Japan a country ruled by the heavenly emperor? This paper uses *Kojiki* and *Nihon Shoki* as examples to explore the concept of the heavenly emperor in the books and the origin of Japanese shintouism. In addition, from the comparative point of view, this paper intends to discuss the connection between the concept of Japanese heavenly emperor and ancient Chinese thought and to explicate the relation between shintouism and Daoism. It is hoped that this paper can offer some new perspective and enlightenment to ancient

* Associate Professor, National Chen-Chi University

Japanese religious thought and the studies of shintouism, and some contribution to the comparative studies of Chinese and Japanese culture and thought.

Keywords: the heavenly emperor, *Kojiki*, *Nihon Shoki*, shintouism, Daoism

日本神道と中国思想
—天皇思想をめぐって—

徐翔生*

要旨

中世の歴史書『神皇正統記』において、日本は「神の国」であると説かれ、天皇は日本の国土を創成した神の子孫であると述べられている。『神皇正統記』から深く影響を受けた伊勢神道には、こうした神国思想が明らかに存在し、天皇を中心とする世界を持つ。そして近代の国家神道では、天皇を現人神とし、日本は神である天皇が統治する神国であるとする。このような思想は、太平洋戦争の敗戦に至るまで、日本人の意識に深い影響を与えた。周知のように、神道では天皇は天照大神の子孫であり、生き神であるとされる。そして日本は万世一系の天皇が統治する国であるという。このような思想は世界の宗教史上でも特異な性格と構造をもっており、世界に類例のない特異な形態であった。では、何故天皇は神の子孫であるか。また日本は何ゆえ天皇が統治する国なのであろうか。本論では、神道が文献的な拠り所とする『古事記』、『日本書紀』の神代巻を中心とし、その中に見られる天皇の王権に関する思想を考察しながら、日本古代における神道の思想を探ってみたいと思う。また比較思想的な視点から日本古代の天皇制と中国の古代思想、特に道教との関連についても論じてみる。この研究が日本の古代宗教思想、神道思想の解明、及び日中思想文化の比較研究に少しでも役に立つことができれば、幸いに思う。

キーワード：天皇、『古事記』、『日本書紀』、神道、道教

* 国立政治大学日本語文系専任助教授

日本神道と中国思想―天皇思想をめぐって―

徐翔生

一、はじめに

中世の歴史書『神皇正統記』において、日本は「神の国」であると説かれ、天皇は日本の国土を創成した神の子孫であると述べられている。『神皇正統記』から深く影響を受けた伊勢神道には、こうした神国思想が明らかに存在し、天皇を中心とする世界を持つ。そして近代の国家神道では、天皇を現人神とし、日本は神である天皇が統治する神国であるとする。このような思想は、太平洋戦争の敗戦に至るまで、日本人の意識に深い影響を与えた。周知のように、神道では天皇は天照大神の子孫であり、生き神であるとされる。そして日本は万世一系の天皇が統治する国であるという。このような思想は世界の宗教史上でも特異な性格と構造を持っており、世界に類例のない特異な形態であった。では、何故天皇は神の子孫であるか。また日本は何ゆえ天皇が統治する国なのであろうか。本論では、神道が文献的な拠り所とする『古事記』、『日本書紀』の神代巻を中心とし、その中に見られる天皇の王権に関する思想を考察しながら、日本古代における神道の思想を探ってみたいと思う。また比較思想的な視点から日本古代の天皇制と中国の古代思想、特に道教との関連についても論じてみる。この研究が日本の古代宗教思想、神道思想の解明、及び日中思想文化の比較研究に少しでも役に立つことができれば、幸いに思う。

二、『神皇正統記』の神国観

十四世紀に、北畠親房は『神皇正統記』を書いた。この本において、北畠親房は日本が「神の国」であることから説き起し、神武天皇から後村上天皇までの九十六代を教え、歴代の天皇の称号、諡、在位年数などを述べている。北畠親房はこの本の冒頭において、次

のように述べている。「大日本者神国也。天祖ハジメテ基ヲヒラキ、日神ナガク統ヲ伝給フ。我国ノミ此事アリ。異朝ニハ其タグヒナシ。此故ニ神国ト云也。」(「序論」)[1]

このように、北畠親房は「大日本者神国也」と、日本を「神国」と捉えている。北畠親房はこの神国思想を一層高い次元において昇華させ、「天祖ハジメテ基ヲヒラキ、日神ナガク統ヲ伝給フ」というように、日本の国土創成の神である天照大神とその子孫である天皇こそが、日本を統治すると述べている。この統治原理は日本のみにあり、「異朝ニハ其タグヒナシ」ゆえに、日本は唯一の神国であると北畠は主張する。

北畠親房は日本が神国であると説くと同時に、さらに神道の政治的意義を次のように述べている。「我国ノミ天地ヒラケシ初ヨリ今ノ世ノ今日ニ至マデ、日嗣ヲウケ給コトヨコシマナラズ。(中略) 是儞神明ノ御誓アラタニシテ餘国ニコトナルベキイハレナリ」(「神代」)[2]。すなわち天神の神意により、その大業を歴代天皇が嗣いで統治してきたことが正道なのであり、天皇が日本を統治すべきであるという。そして「代クダレリトテ自ラ苟ムベカラズ。天地ノ始ハ今日ヲ始トスル理ナリ。加之、君モ臣モ神ヲサルコト遠カラズ。常ニ冥ノ知見ヲカヘリミ、神ノ本誓ヲサトリテ、正ニ居センコトヲ心ザシ、邪ナカランコトヲ思給ベシ」(「仁徳」)[3]とあるように、神は人を安んじることを本誓とするから、この本誓に従うのが君主の道徳的責任であるという。これは「天地ノ始ハ今日ヲ始トスル理」であるために、天皇に政治的意義があるのは当然であるという。

以上は『神皇正統記』に見られる日本が神国であり、及び天皇に政治的意義があることに関する記述である。南北朝の皇統をめぐる約五十年にわたる争いの中で、南朝側にいた北畠親房は、おそらく南朝の正統性を明らかにすることを目的として、この本を書いたで

---

1 岩佐正校注日本古典文学大系 87『神皇正統記』(東京：岩波書店、1965 年 2 月) P.41。
2 日本古典文学大系『神皇正統記』(東京：岩波書店、1965 年 2 月) PP.48-49。
3 日本古典文学大系『神皇正統記』(東京：岩波書店、1965 年 2 月) P.83。

あろう。そして『神皇正統記』から深く影響を受けた伊勢神道は、以上述べた神国の思想が明らかに存在し、天つ神の御子である天皇を中心とする世界であった。このような神国思想は、近代の国家神道にも存在しており、太平洋戦争の敗戦までは続いていた。では、何故日本の天皇は神であるのだろうか。

三、記紀における神の出現

『神皇正統記』が訴えている天皇が神であるということを掘り下げていくと、『古事記』と『日本書紀』にまで遡ることができよう。『古事記』と『日本書紀』において、日本国土の創成及び神々の生成は次のように述べられている。以下、『古事記』、『日本書紀』の神代巻を中心とし、その中における神の出現を考察してみよう。

『古事記』はその冒頭において日本の創世を語っていて、その概略は次の通りである。天地が初まりの時、高天原に生まれた伊邪那岐と伊邪那美は、天神の命令を受けてオノコロ島に降って、国土の大八島国を生み、神々をも生んだ。ところが、伊邪那美が火神を生んだ時に火の災を受けて隠れ、黄泉国へ行く。そこで伊邪那岐は伊邪那美を慕って黄泉国を訪問するが、黄泉国の穢れを見て逃げ帰る。

伊邪那岐は黄泉国から帰り、穢れた身体を清めるために、筑紫の日光の橘の小門の阿波岐原において川の水の中に入って禊をした。その際、「是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月読命。次に御鼻を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、建速須佐之男命」(上巻「禊祓と神々の化生」)[4]というように、伊邪那岐が左目を洗った時に天照大神、右目を洗って時に月読命、鼻を洗っては須佐之男命という三柱の尊い神を生むのである。『古事記』においては、これがすなわち三貴子の誕生であるという。

---

[4] 本論では、『古事記』からの引用は倉野憲司・武田祐吉校注日本古典文学大系 1『古事記祝詞』(東京:岩波書店、1958 年 6 月)によるが、適宜表記を改めたところがある。以上、日本古典文学大系『古事記祝詞』(東京:岩波書店、1958 年 6 月) P.71 による。

『日本書紀』にも三貴子の誕生について書かれており、日神・月神・須佐之男も伊邪那岐が禊の最後に化生したことが記載されている。「左の眼を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて天照大神と曰す。復右の眼を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて月読尊と曰す。復鼻を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて素戔嗚尊と曰す」（「神代上・一書第六」）[5]というように、その内容は『古事記』とほぼ同様である。そして『神皇正統記』では、上述した神々の生成の記述も見受けられ、大筋は『古事記』、『日本書紀』とほぼ同じである[6]。

以上は『古事記』と『日本書紀』に見える天照大神の由来に関する記述である。神道では、ここで確認した『古事記』と『日本書紀』の伝承から、天照大神は日の神として神々を統率する最高の位置にあるところから、日本の神の中心とされている。したがって神道では、天照大神が高天原の主宰者として位置づけられ、神道論においても、天照大神を中心とした論を展開している。そして皇室と密接な関連のある伊勢神道では、天照大神は日の神として仰がれ、日本皇室の祖先神として伊勢神宮に祀られているのである[7]。では、何故天照大神は日本の皇祖神であろうか。

四、日本天皇制の起源

『古事記』によれば、天照大神はその子の天忍穂耳命に日本を統治させるために地上界へ降臨することを命じた。しかし天忍穂耳命は降臨するにあたって、自分の子の邇邇芸命が生まれたので、この大役を邇邇芸命に譲っている。かくして邇邇芸命は、改めて天照大

---

5 『日本書紀』からの引用は坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注日本古典文学大系 67・68『日本書紀上・下』（東京：岩波書店、1967 年 3 月、1965 年 7 月）によるが、適宜表記を改めたところがある。以上、日本古典文学大系 67『日本書紀上』（東京：岩波書店、1967 年 3 月）PP.95-96 による。

6 日本古典文学大系『神皇正統記』（東京：岩波書店、1965 年 2 月、PP.50-54）を参照。

7 阿蘇谷正彦『神道思想の形成』（東京：ぺりかん社、1985 年 5 月、PP.245-250）を参照。

神の「命の随に天降るべし」（上巻「邇邇芸命 2 猨田毘古神」）[8]という命を受け、父天忍穂耳命に代って地上界へ降臨することになる。

邇邇芸命は高天原から日向に降臨した時、木花之佐久夜毘売と結婚し、火照命、火須勢理命、火遠理命を生む。火遠理命は天津日高子穂穂手見命とも言い、皇統を継ぐべき御子であるが、豊玉毘売命と結婚して鵜葺草葺不合命を生む。鵜葺草葺不合命は後におばの玉依毘売命を娶り、五瀬命、稲氷命、御毛沼命、若御毛沼命を生む。若御毛沼命は別名を神倭伊波礼毘古命と言い、後の初代天皇の神武天皇であると伝えられている[9]。

以上は『古事記』における皇統系譜の構造である。『日本書紀』においては、『古事記』に見られる天孫降臨と同じような記述も見受けられる。ただし『日本書紀』の各所に見られる降臨の内容は、必ずしも同じではない。たとえば『日本書紀』の「神代下」では、天照大神の命令によって降臨が行われたと記すものもあれば、高皇産霊神の命令によって降臨が行われたと記す箇所もある。さらにこの二神の共同命令であるとも書かれている[10]。鳥越憲三郎によれば、天孫が降臨するにあたって、一切の命令はすべて高皇産霊神が出しており、天照大神を系譜の上で示したのは後の加筆であるという[11]。しかし神道では、『古事記』の神代巻を拠り所にしたので、邇邇芸命は皇祖神である天照大神の命を受けて、日本に降臨することが説かれている[12]。

---

[8] 日本古典文学大系『古事記祝詞』（東京：岩波書店、1958 年 6 月）P.127。

[9] 日本古典文学大系『古事記祝詞』（東京：岩波書店、1958 年 6 月、PP.125-147）を参照。

[10] 『日本書紀』巻第二「神代下」の「一書第一」では、邇邇芸命は天照大神の命令で降臨が行われたことが記されている。しかし「一書第二」「一書第四」「一書第六」においては、高皇産霊神の命令によって降臨が行われたと記されている。そして「一書第三」「一書第五」「一書第七」「一書第八」では、これら二神の共同命令によって降臨が行われたと書かれている。以上のように、天孫降臨の命令者が誰であるかということについて、『日本書紀』は『古事記』と少し異なっている。以上、日本古典文学大系『日本書紀上』（東京：岩波書店、1967 年 3 月、PP.134-163）を参照。

[11] 鳥越憲三郎『神々と天皇の間』（東京：朝日新聞社、1971 年 2 月、PP.222-223）を参照。

[12] 谷省吾『神道原論』（三重：皇学館大学、1971 年 6 月、P.92）を参照。

以上のように、『古事記』によれば、天照大神が自らの子孫に対し日本を統治することを命じたが、その神勅によって、皇孫である天皇が日本を統治するようになった。そして天照大神から天忍穂耳命、邇邇芸命、火遠理命、鵜葺草葺不合命、若御毛沼命を経て、その第六代目が第一代天皇となった神武天皇であるという。だから、日本の国は神によって創られ、天照大神が日本を統治する人を決定したのである。そして日本の天皇は天照大神の子孫であり、日本の国は天照大神の子孫が治める国であるという。ここから日本は万世一系の天皇が統治するという思想が生じる。天皇が日本を統治することの正当性は、以上あげた『古事記』と『日本書紀』の記事に依拠しているのである。

五、天皇思想と日本神道

以上、『古事記』と『日本書紀』の神代巻に見える天皇制の起源、及び天皇が日本を統治することの正当性について述べてきた。これまで述べたところからも分るように、日本最古の歴史書『古事記』と『日本書紀』において、日本の皇統系譜が書かれており、天皇が日本を統合する思想はすでに構成されていた。神道では、天皇は日本の国土を創成した神の子孫とされ、それ自身も神であるとする。そして天照大神が、その子孫こそが王として日本を治めることを宣告したから、天皇家が代々にわたって日本を統治する権力を持っていると説かれている。「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫、就でまして治せ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、当に天壌と窮り無けむ」(『日本書紀』「神代下・一書第一」)[13]という天照大神のこの神勅があるために、日本は天照大神の子孫が王として治める国なのである。天照大神の道を継承し、皇祖の意志を継承する天皇の上に、神のすがたを見ることができる。だから皇孫である天皇が日本を統治することがすなわち神道と解釈さ

[13] 日本古典文学大系『日本書紀上』(東京：岩波書店、1967 年 3 月) P.147。

れている[14]。

近代に入ってから、以上述べた天孫降臨の神話と政治思想が結びつき、天皇を現人神とし、天皇の存在を神聖不可侵として、国民に神の子孫である天皇を崇拝することを強制した。近代の国家神道によれば、日本は万世一系の天皇が統治する神国であり、世界を支配する神聖な使命を有しているとされる。戦後、日本の天皇は人間宣言をして神ではなくなったが、それまでは現人神と呼ばれて神であったわけである。この天皇が神であるという思想や信仰は、今日でも日本人の意識に大きな影響を与えていると思われる。

六、中国における天皇の思想

ここでひとこと言わなければならないのは、『古事記』に見られる天皇の王権思想と中国の古代思想は、深い思想的関連を持っているということである。特にその中に見られる日本の天皇制の成立そのものに、中国古代思想の影響が明らかに見え、道教と密接な関連があると考えられる。では、日本天皇の王権思想と中国の古代思想はいったいどのようなつながりがあるのであろうか。

古代中国では、宇宙は天上の神々の世界と地上の人間世界、及び死者の世界という三つの世界に分かれていると考えられていた。その三つの世界の中で、天上世界の最高神が昊天上帝、すなわち天皇と呼ばれている。中国最古の文献である『詩経』、『書経』、『尚書』には、昊天上帝のことがすでに書かれていて、天皇は宗教的な支配によって地上の世界、死者の世界を支配すると記されている。宇宙の最高神である天皇は、宗教的な概念であると同時に、政治的な概念でもあったと述べられている[15]。

中国の古代社会において、いわゆる「天」の信仰があり、国を支

---

[14] 谷省吾『神道原論』（三重：皇学館大学、1971 年 6 月、PP.90-91）を参照。

[15] 『詩経』「周頌・昊天有成命」、「魯頌・閟宮」、「商頌・長發」（韓峥嶸訳注『詩経訳注』所収、台北：建安出版社、1997 年 11 月、PP.409-410、P.442、P.453）、『書経』「虞書・堯典」（国学叢書『書経読本』所収、台北：大方出版社、1978 年 11 月、P.2）、『尚書』「虞夏書・堯典」、「周書・召誥」（屈万里註訳『尚書今註今訳』所収、台北：台湾商務印書館、1971 年 10 月、P.4、P.117）を参照。

配する原理は天の思想と深くかかわっていた。「天より命があり、この文王を命ずる」(「大雅・大明」)[16]というように、国の統治者は天の命によって選ばれるという思想があった。国の統治者は天の命によって選ばれるために、天子ともいう。天によって任命された天子は国を統治するが、天の命に背いた場合はその怒りを受けて、王の地位を追われるという。したがって天子は常に天を祀って、その意志に従って政治を執行しなければならなかった。このような思想は『詩経』、『書経』にすでに明確に理論化されている[17]。「周は古い国であるが、天命を受けて国勢を新たにした。周の国威は大いに明らかに、その天命は久しい」(「大雅・文王」)[18]という『詩経』の言葉から、その時代の天に対する信仰のようすがうかがえよう。

中国では、天に対する畏れの感情を持つことだけでなく、さらに天を尊崇し天に対して敬虔な態度を持たなければならない。『礼記』に「天を尊崇し天を祭り、天子は天を祭祀すべき」(「郊特性第十一之一」)[19]というように、天子は天に対する敬虔な祭りをしなければならない。そして天子は五年に一度諸国を巡視して、その地方の風俗を見る。天子は諸国へ行った時に、まずそれぞれの方角の山岳に至り、柴を焼いて天に報告し天を祭る[20]。以上のように、中国においては、紀元前十世紀の周の時代に、天の信仰がすでに確立されていて、天を祭祀する風習が存在していた。しかし当時において、天を祭るのは天子だけが行えることで、すなわち君主の特権であった。

中国古代における天の信仰をさらに遡ってみると、星を対象にした星占術的な天文学に帰着しよう。中国では、古くから天文学が盛んであり、星が信仰の対象となっていた。星の中でひときわ目立つ

---

16 『詩経』「大雅・大明」の「有命自天、命此文王」(前掲『詩経訳注』P.323)による。

17 『詩経』「大雅・皇矣」(前掲『詩経訳注』PP.333-335)、『書経』「商書・盤庚」(前掲『書経読本』PP.84-85、P.89)を参照。

18 『詩経』「大雅・文王」の「周雖旧邦、其命維新。有周不顕、帝命不時」(前掲『詩経訳注』P.319)による。

19 『礼記』「郊特性第十一之一」(孫希旦撰『礼記集解』所収、台北:文史哲出版社、1976年10月、P.626)を参照。

20 『礼記』「王制第五」、「郊特性第十一之一」(前掲『礼記集解』PP.295-296、P.628)を参照。

北極星は、多くの星がその周辺をめぐるために、至上神として崇められた。『論語』に「政を為すに徳を以ってせば、譬えば北辰の、其の所に居て、衆星の之れに共うが如し」(「為政第二」)[21]というように、道徳による政治が北辰といわれる北極星と同じく、周囲からの尊崇を得るという。ところが、紀元前三世紀の戦国時代の終わり頃から占星術が盛んになったこともあり、北辰の北極星はやがて神格化されて、宇宙の最高神「天皇大帝」へとなったのである。北極星が宇宙の最高神という信仰は、漢代の史籍『後漢書』、『史記』にすでに出ている[22]。このような考え方は道家的な書籍『淮南子』にも見られる[23]。

しかし中国思想では、これを否定する方向と肯定する方向との二つに分かれている。儒教は合理的な観点から昊天上帝を否定して、天皇を「天」という原理的なものに置き換えて、天に対して人間の人格的な価値である「徳」を強調している。したがって儒教では、天皇は次第に宇宙を主宰する人格神としての性質を失い、人間に内在する天理、天道といった非人格的原理に変容するようになった。これに対して、道教はこの考え方を根源的に推し進め、天皇は天上の神仙世界に住み、人間の運命を支配している天皇大帝とする。以上のように、儒教と道教の考え方の相違によって、中国では天皇はもともと昊天上帝と呼ばれる天皇と、北極星を神格化した天皇大帝の天皇となったのである。そして道教の興隆によって、天皇大帝はさらに昊天上帝に代わるものとして、道教の最高神になると同時に、宇宙の最高神である天皇となったという[24]。

中国では、紀元前三世紀の秦漢時代から六世紀の北周時代まで、

---

[21] 吉川幸次郎『論語上』(東京：朝日新聞社、1965年12月) P.27。

[22] 『後漢書』「張衡列伝第四十九」(韓復智・洪進業註『後漢書紀伝今註七』所収、台北：国立編訳館、2003年10月、PP.3394-3395)、『史記』「天官書第五」(韓兆琦訳注『新訳史記三』所収、台北：三民書局、2008年2月、P.1351)を参照。

[23] 『淮南子』「天文訓」(許匡一訳注『淮南子上』所収、台北：台湾古籍出版社、2006年2月、P.126)を参照。

[24] 劉屹「老子銘における老子と太一」(『漢学研究・第21巻第1期』所収、2003年6月、PP.94-96)を参照。

天皇とは宇宙の最高神とされていた天皇大帝であり、天上世界にいる道教の神の名前である。ところが、七世紀の唐代、道教信者である唐の高宗が自ら「天皇」と名乗り、死後は「天皇大帝」とおくり名された[25]。かくして、天皇は道教の神から国を治める神となったのである。以上のように、「天皇」という称号は、実は中国の昊天上帝また道教の神「天皇大帝」に由来し、道教の信仰と深くかかわっている。天皇の称号は道教の神の名前から来たという解釈は、福永光司の『道教と日本文化』などでも指摘されている[26]。

七、三種の神器と神道思想

以上述べてきたように、天皇という用語は中国で古くから成立していて、天皇が神であるという思想は古代中国にすでに存在していた。それだけでなく、天皇の位を象徴するものとしての三種の神器は、中国の古代思想にも存在しており、特に道教の思想と密接な関係があるように思われる。では、天皇の位の象徴とされる三種の神器は、いったい何を意味しているか、また中国の古代思想とどんな関連があるのであろうか。まず三種の神器の起源から確認しておこう。

『古事記』によれば、天孫降臨に際して邇邇芸命は、御供に天児屋命、布刀玉命、天宇受売命、伊斯許理度売命、玉祖命の五伴緒の神を従え、八尺瓊勾璁・八咫鏡・草薙剣を賜わり、この三種の神器を皇位継承の璽となった。三種の神器の中で、天照大神は八咫鏡について、「此れの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くが如伊都岐奉れ」(上巻「天孫降臨」)[27]と述べ、それを皇位のしるしとした。この三種の神器は皇位を象徴する聖物として、長く後代に受け伝えられたという。

---

[25] 『旧唐書』「本紀第五・高宗下」(許嘉璐編『二十四史全訳・旧唐書一』所収、上海：漢語大詞典出版社、2004 年 1 月、PP.78-89) を参照。
[26] 福永光司『道教と日本文化』(京都：人文書院、1982 年 3 月、PP.45-46) を参照。
[27] 日本古典文学大系『古事記祝詞』(東京：岩波書店、1958 年 6 月) P.127。

『日本書紀』の「神代下」の「一書第一」にも、天孫降臨にあたって、天照大神が邇邇芸命に八尺瓊の曲玉・八咫鏡・草薙剣を授けたことが記されていて、また五部神が降臨に随従することも見えている[28]。そして「一書第二」には、降臨にあたって、天照大神が天忍穂耳命に八咫鏡を授けて、「此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。與に床を同じく殿を共にして、斎鏡とすべし」（神代下「一書第二」）[29]と述べたと書かれている。日本宮中祭祀の淵源は、ここに由来しているという[30]。

神道では、以上述べた『古事記』と『日本書紀』に書かれている鏡・剣・玉の授与の物語を伊勢神宮の由来と説き、三種の神器を神宮の神体の起源説話とする。すなわち天孫降臨の際、天照大神が邇邇芸命に三種の神器を授けたが、この三種の神器を代々の天皇に相伝えて皇位のしるしとした。そのうち八咫鏡については、天照大神が「此れの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くが如伊都岐奉れ」、「此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。與に床を同じく殿を共にして、斎鏡とすべし」と述べたので、歴代天皇の身辺に置かれて、常に宮中にあった。垂仁天皇の時、皇女倭姫命がその剣と鏡を奉じて、大和から伊勢に遷して、伊勢神宮内宮の神体となった[31]。そして伊勢神宮は天照大神を祀り、八咫鏡を神体としているとされることから、すべての神社の上に立つ本宗とされたという。

近代の国家神道では、前節に述べた天照大神がその子孫を王として日本を治めさせるという「神勅」を強調し、神の子孫である天皇が日本を統治することを主張した。また天照大神が天孫に三種の神器を授けたことを強調して、天皇が日本を統治することの正統性と神聖性を説いている。そして今日に至っても、神道では『古事記』

---

[28] 日本古典文学大系『日本書紀上』（東京：岩波書店、1967年3月、PP.146-147）を参照。
[29] 日本古典文学大系『日本書紀上』（東京：岩波書店、1967年3月）P.152。
[30] 谷省吾『神道原論』（三重：皇学館大学、1971年6月、P.92）を参照。
[31] 真弓常忠『神道の世界』（大阪：朱鷺書房、1984年12月、P.55）を参照。

と『日本書紀』は「神典」と呼ばれ、多くの学者は『古事記』と『日本書紀』の神代巻を拠り所として、神道の思想を究明している。また上述した神器の思想を説き、『神皇正統記』における「鏡ハ一物ヲタクハヘズ。私ノ心ナクシテ、万象ヲテラスニ是非善悪ノスガタアラハレズト云コトナシ。其スガタニシタガヒテ感応スルヲ徳トス。コレ正直ノ本源ナリ」(「天津彦々火瓊々杵尊」)[32]という神器観を取り上げ、天照大神の神徳を説くと同時に、神道における「正直」の思想を説いている[33]。

八、中国における神器の思想

ここで注意すべきなのは、鏡と剣と玉という三種の神器は、単に天皇の位を象徴するものに止まるものでなく、宗教的色彩も強く持ち、古代の日本社会にすでに存在していたということである。すでに多くの学者が指摘したように、古墳時代に天皇や皇族の墓の中には、副葬品として銅鏡や碧玉が入れられているが、これらの副葬品からも分るように、神器の思想は四世紀頃すでに日本に現われていた。『日本書紀』にも書いてあるが、剣と鏡が天子として持つべき璽符で、天皇の位を伝える時には璽符としての剣と鏡が用いられていた。たとえば「継体天皇」と「宣化天皇」と「持統天皇」の条に、天皇の即位にあたって、璽符・神璽の剣と鏡を天皇に献ずる儀式が行われて、剣と鏡が天皇の位の象徴として授受されたことが書かれている[34]。ただし『日本書紀』では、天皇の位を象徴するものは剣と鏡の二種の神器であるが、玉が用いられる記述はほとんどないのである。

何故鏡と剣と玉が天皇の位を象徴するものとなったのか、また何故鏡と剣と玉が三種の神器とされるようになったのか。これは中国の古代思想と深くかかわっており、道教思想と関係があるだろう。

---

[32] 日本古典文学大系『神皇正統記』(東京:岩波書店、1965 年 2 月) PP.60-61。
[33] 谷省吾『神道原論』(三重:皇学館大学、1971 年 6 月、PP.92-95) を参照。
[34] 日本古典文学大系『日本書紀下』(東京:岩波書店、1965 年 7 月、PP.20-21、P.57、P.500) を参照。

中国では、古くから玉と鏡と剣は神秘なもの、神霊性を持つものという考え方があった。『礼記』には、中国古代の祭祀の儀礼において、天神・地祇・人鬼の祭りに玉が供せられることが書かれている[35]。『淮南子』にも「明鏡が物の性を形わす」(「俶真訓」)[36]と、鏡が神霊性を持つものとして述べられている。そして『史記』には、漢高祖が宝剣を抜き撃ちて蛇を斬ったことが記述されており、この斬蛇の剣が宮に祀られたことが載せられている[37]。以上のように、玉と鏡と剣が霊妙なはたらきを持ち、宗教的な霊力を持つものとする考え方は、中国では非常に古くから成立している。すでに福永光司も指摘するように、中国漢代墓の発掘報告によれば、中級以上の墳墓の場合、死体を埋葬する時に鏡と剣と玉がよく死体の脇に置かれており、鏡と剣と玉が副葬されているという[38]。

中国では、鏡と剣と玉という三種神器の思想は、紀元前後の前漢時代にすでに存在した。後漢時代になると、前述した斬蛇の剣と皇帝の玉璽が組み合わされて、伝国の宝と言われるようになった。この思想はのちに道教の思想と結びついて、鏡と剣が神璽、伝国璽とされるようになったのである。『旧唐書』にも書かれているが、七世紀の唐代に鏡と剣は神璽と呼ばれて、中国の伝国璽とされていた。当時、唐の高宗は「天皇」と称し皇后を「天后」と称して、天皇即位の時に神璽の鏡と剣が用いられ、鏡と剣を神宝とも言っていた[39]。鏡と剣が神璽、伝国璽とされることは、唐の時代に道教が盛んでおり、高宗が熱心な道教信者にも関連があるだろう。

もっとも鏡と剣が神璽もしくは伝国璽とされたのは、中国の道教思想と大いにかかわっている。道教では、古くから剣が帝王権力の

---

35 『礼記』「礼器第十之二」(孫希旦撰『礼記集解』所収、台北：文史哲出版社、1976年10月、P.589、PP.632-633)を参照。
36 許匡一訳注『淮南子上』所収、台北：台湾古籍出版社、2006年2月、P.74)を参照。
37 『史記』「高祖本紀第八」(韓兆琦訳注『新訳史記一』所収、台北：三民書局、2008年2月、PP.461-464)を参照。
38 福永光司『道教思想史研究』(東京：岩波書店、1987年9月、P.16-17)を参照。
39 『旧唐書』「本紀第五・高宗下」(前掲『二十四史全訳・旧唐書一』P.78)を参照。

象徴とみなされているが、鏡は神仙術の霊器とされ、神秘的な呪術力を持つとされている。鏡と剣が神秘的な霊力を持つことは、六世紀の道教の天師である陶弘景の『真誥』にすでに見られる。この書物において、鏡と剣は宗教的な霊力を持つこと、そして宇宙の最高神の権威権力のシンボルであることが説かれていると同時に、鏡と剣は道教の修行者にとって不可欠であることが述べられている[40]。中国では古くから道教が流行したこともあり、鏡と剣を神秘化し神霊視する思想は、古くからすでに存在していたのである。

鏡と剣は神秘的な霊力を持つことのみならず、さらにこの世界の支配者の霊威をも意味している。七世紀の道教教団の指導者司馬承禎の『上清含象剣鑑図』にも書かれているが、鏡と剣は「象を尚び霊に通ずる」[41]という霊妙な威力を持つために、この世界の支配者の霊威を象徴することができるという。『上清含象剣鑑図』によれば、地上の帝王は天上の帝王の命令を受けて、地上の世界の支配者となっているので、天上の帝王の権威権力を象徴する鏡と剣は、同時に地上の帝王の権威権力の象徴であるという[42]。鏡と剣が呪術的な威力、神秘的な霊力を持つという記述は、道教文献のところどころに見えているが、儒教の経典にはほとんど見られないのである。

以上のように、中国の道教においては、鏡と剣が宇宙の最高神と地上の権威権力のシンボルになるとともに、宇宙のすがたを象徴しているという意味も含まれている。したがって道教では、鏡と剣が組み合わされて共に神器とされ、宗教的な霊力を持つ神器として祭られていたのである。ところが、四世紀の頃になって、鏡と剣に儒教のシンボルである玉を加えて、三種の神器になったという。このような観点から考えてみれば、日本における天皇の璽としての三種の神器は、実は中国の古代思想と深い関係にあり、中国の道教に由

[40] 陶弘景『真誥』「巻九・協昌期第一」（仙仏霊異叢書『真誥上』所収、台北：広文書局、1989 年 12 月、P.2、P.11）を参照。
[41] 司馬承禎『上清含象剣鑑図』（『正統道蔵十一』所収、台北：新文豊出版社、1988 年）P.450。
[42] 司馬承禎『上清含象剣鑑図』（前掲『正統道蔵十一』PP.450-452）を参照。

来すると見ることもできよう。

九、むすびに

以上、『古事記』と『日本書紀』を中心に、日本古代における天皇の由来と中国の古代思想との関連を考察してきた。これまで述べたことを概観すれば、日本の天皇思想には、中国古代の天皇思想、特に道教などの影響が見受けられる。そして皇位継承の璽としての三種の神器に関しても、中国の道教の色彩が強く、また道教思想も継承されていた。また『古事記』と『日本書紀』の神代巻を拠り所にした神道は、中国の古代思想といくつかの共通点をもっており、道教などの影響が見受けられる。

すでに多くの学者が指摘しているように、神道は古くから伝えられて来た日本の民族的風習で、日本の伝統的宗教であるという。日本では、神道という言葉は『日本書紀』にすでに見えており、神道は民族的風習としての宗教的信仰であるという[43]。この民族的風習としての宗教的信仰は、仏教、儒教、道教などの外来宗教と全く関係なく、中国思想は神道の形成に影響を与えることは何もなかったのである。このような見解は本居宣長の『玉勝間』、津田左右吉の『日本の神道』にすでに見えている[44]。これと同じような見方は柳田国男の『先祖の話』にも和辻哲郎の『日本古代文化』にも見られる[45]。そして現代宗教学者真弓常忠の『神道の世界』などにも、このような見解が述べられている[46]。

しかし本論で論じてきたように、『古事記』と『日本書紀』に見ら

---

[43] 以上、『日本書紀』の「天皇、仏法を信けたまひ神道を尊びたまふ」（巻第二十一「用明天皇」）、「仏法を尊び、神道を軽りたまふ」（巻第二十五「用明天皇」）を参照。『日本書紀』からの引用は、日本古典文学大系『日本書紀下』（東京：岩波書店、1965年7月）P.154、P.268による。

[44] 本居宣長『玉勝間』（『本居宣長全集第一巻』所収、東京：筑摩書房、1968年5月、P.440）、津田左右吉『日本の神道』（『津田左右吉全集第九巻』所収、東京：岩波書店、1964年6月、PP.1-3）を参照。

[45] 柳田国男『先祖の話』（『定本柳田国男全集第十巻』所収、東京：筑摩書房、1969年3月、PP.133-134）、和辻哲郎『日本古代文化』（『和辻哲郎全集第三巻』所収、東京：岩波書店、1962年1月、PP.275-279）を参照。

[46] 真弓常忠『神道の世界』（大阪：朱鷺書房、1984年12月、P.41）を参照。

れる天皇の王権思想そのものにおいても、そして皇位継承の璽としての三種の神器の考え方においても、いずれも中国の古代思想と共通点を持ち、道教とまったく無縁とは言いがたい。そして『古事記』と『日本書紀』の中で語られている神道の思想は、決して中国思想とは無関係ではなく、むしろ道教と密接な関連があると考えられよう。したがって神道は中国の影響が全くなかった、とは言いきれない。日本神道ははたして中国思想とは無縁であると断言しうるか、十分に検討する必要があると思う。このことは日本の神道を考察する時、きわめて重要な示唆をわれわれに与えてくれるのではないかと思う。

参考文献

阿蘇谷正彦（1985）『神道思想の形成』東京：ぺりかん社
阿蘇谷正彦（1992）『日本の伝統と宗教』東京：ぺりかん社
阿蘇谷正彦（1994）『神道とは何か』東京：ぺりかん社
坂出祥伸（2005）『道教とは何か』東京：中央公論新社
相良亨（1989）『日本の思想』東京：ぺりかん社
桜井勝之進（1990）『日本神道論』東京：学生社
谷省吾（1984）『神道原論』三重：皇学館大学
鳥越憲三郎（1970）『神々と天皇の間』東京：朝日新聞社
直木幸次郎（1990）『日本神話と古代国家』東京：講談社
中村璋八（1998）『中国人と道教』東京：汲古書院
平野孝国（1989）『神道世界の構造』東京：ぺりかん社
福永光司（1982）『道教と日本文化』京都：人文書院
福永光司（1987）『道教思想史研究』東京：岩波書店
村岡典嗣（1956）『神道史』東京：創文社
和辻哲郎（1962）『日本古代文化』（『和辻哲郎全集第三巻』所收）東京：岩波書店